

## 論 文

# 社会的相互作用における接近的・回避的動機づけが 対人ネットワークの変化に及ぼす影響

山下 倫実・相馬 敏彦

## 【要 約】

本研究では、最も親しくなりたい友人との関係における接近的・回避的動機づけが個人の持つ対人ネットワークの変化に及ぼす影響について縦断的に検討を行なった。検討された対人ネットワークは、最も親しくなりたい友人と自らの双方の知り合いからなる共通ネットワークと、自分だけの知り合いからなる独自ネットワークである。調査参加者の性別に偏りがあったため、分析に耐えうると判断された男性の結果のみを報告する。

その結果、最も親しくなりたい友人との関係において回避的動機が強いほど、その友人との共通ネットワークを拡大させ、自らの独自ネットワークを縮小させることが示唆された。このような影響過程は、最も親しくなりたい友人との関係における接近的動機ではなく、回避的動機のみで認められた。つまり、最も親しくなりたい友人との関係が、意見の不一致や対立などの不快を回避することを動機づけるような関係である場合、人は自らの対人ネットワークを変化させることによって、それに対処する可能性がある。

キーワード：社会的相互作用における接近的・回避的動機づけ、対人ネットワーク、友人関係

## 【問 題】

多くの人にとって、親密な関係は幸福感や安心感の源であり、このような快感情をもたらし関係をできる限り長く継続したいと望む。しかし一方で、人は自らにとって必ずしも心地よいと言えない関係であっても維持したり継続させようとしたりすることがある。たとえば、関係解消が心理的負担感や強い緊張感を生じさせる場合である。人が関係を継続する動機づけには、関係を続けることによって得られる快を追求したいという

接近的動機づけと関係を解消することによってもたらされる不快を回避したいという回避的動機づけが存在すると考えられるのである。これらの考え方は、Higgins (1998) の制御焦点理論とも整合的なものである。それによると、人は快に接近し、不快を回避する際に質的に異なった方略をとり、この差異が人の感情、思考、行動に影響を与えることを示唆している。具体的には、どちらも望ましい結果を達成する試みでありながら、望ましい結果の有無に焦点をあてる「促進焦点」と、望ましくない結果の有無に焦点をあてる「予防焦点」の2つの方略が存在することを示している。

この社会的動機に関する議論と並行して、親密な関係の当事者による継続意思（コミットメント）に関する研究は、それが関係の期間や関係満足度に影響することを明らかにしてきた（e.g., Rusbult, 1983）。

Johnson (1991: ただし, Elisabeth et al. (2002) より引用)はこのようなコミットメントのタイプを①個人的（Personal）、②規範的（Moral）、③構造的（Structural）と名づけ、区別した上で、それぞれの特徴について下記のように述べている。まず、個人的なコミットメントについては、関係を継続したい（want to）という意識であると考えられ、パートナーや関係に対する肯定的な態度を生じさせるものである。次に、規範的なコミットメントについては、関係を継続するべきだ（ought to）という意識であると考えられ、自己制御やある人物への特別な義務感などを生じさせるものである。さらに、構造的なコミットメントについては、関係を続けるほかない（have to）という意識であり、関係の崩壊に対するネガティブな社会的反応や代替関係の受け入れにくさなどの原因になるものである。

3つのコミットメントのタイプを、上述の接近・回避的動機によって整理するならば、次のようにいえる。個人的（Personal）コミットメントは、パートナーに対する肯定的な愛情や関係へのアイデンティティなど快をもたらす結果へ接近することを動機づけるコミットメントであると考えられる。一方、規範的（Moral）もしくは構造的（Structural）コミットメントは、関係の崩壊やパートナーとの対立など不快をもたらす結果を回避することを動機づけるコミットメントとして捉えることができる。

そして、関係継続意思としてのコミットメントが強く関係満足に影響するのと同様に、接近的動機づけと回避的動機づけそれぞれも関係満足に影響するといえる。実際に、Elisabeth et al. (2002) は縦断的な調査を行い、恋愛関係において接近的なコミットメントと回避的なコミットメントが関係の質に及ぼす影響を検討している。ここで検討された関係の質の指標は、関係満足度、充実感、ポジティブな感情の経験頻度であった。その結果、接近的なコミットメントは関係の質の指標と正の関連が認められ、回避的なコミットメントとは負の関連が認められた。また、接近的動機づけはそれを充足させる接近的相互作用を通じて、回避的動機づけは回避的相互作用を通じて、それぞれ関係満足度を高めることも示されている（相馬・山下, 2011）。

このようにこれまでの研究の多くは、社会的動機づけに基づいた相互作用やそのような相互作用が影響を与える関係の質など、関係内の事象に焦点を当ててきた。見方をかえていえば、社会的動機づけ（接近的／回避的）に基づいて維持されている親密な関係のあり様が、個人の対人ネットワークにどのような変化を生じさせるかという問題についてはあまり十分に検討されてこなかった。しかし、個人の有する対人ネットワークのありようと二者間の相互作用との関連が明らかになっており、社会的動機がネットワークのあり様に影響することも十分に予測できる。

ネットワークと二者間の相互作用との関連について、たとえば、ある関係で葛藤が生起しても、その関係以外に大きな対人ネットワークをもつことで不満が生じにくいことが示されている（Widmer, Kellerhals, & Levy, 2004）。その理由として、ある関係での葛藤を解決するために対人ネットワークからのサポートが有効に機能するためであると考えられる。

それでは、個人がある関係を継続させることについて、接近的（もしくは回避的）動機づけを持っている場合、その関係以外の人々とは具体的にどのような関係を築こうとするのだろうか？本研究では、親密な関係とそれを取り巻く対人ネットワークのあり方について、共通ネットワークと独自ネットワークをとりあげる。

共通ネットワークとは、自分と親密な関係にある他者の双方が相互作用している人々で構成されるものである。一方、独自ネットワークについては、自分と親密な関係にある他者が共有していない、自分だけが知っている人々で構成されるものである。これら二つの観点からネットワークを捉えるのは、二者関係の相互作用から当事者の受ける影響がそれらによって異なると考えられるためである。たとえば、特定の他者との対立時、共通ネットワークに存在する他者が“仲裁者”となり、問題解決を促すことが示唆されている（e.g., Klein, & Milardo, 2000）。また、否定的な言動をとる相手に対して、独自ネットワークの他者からのサポートを知覚することができれば、反論や批判行動をとることができることも示されている（相馬ら, 2004）。このような知見をふまえるならば、少なくとも特定の関係に問題が生じた場合（もしくはその可能性がある場合）、人は自らが持つネットワークを変化させることによって問題に対処しようと動機づけられることが推測される。ただし、互いの意見を調整する仲裁役として機能する共通ネットワークと、自らの立場を守り、自己主張することを促す独自ネットワークのどちらに対して社会的動機がどのような影響を与えるのかについて、根拠となりえるほど十分な蓄積をもたないため、本研究では探索的に検討を行なう。

## 【方 法】

調査協力者 大学生97名（男性77名、女性20名）が調査に協力した。平均年齢19.15

歳 (SD= 1.29) であった。女性については、20名分のデータしか得られなかったため、今回は分析に耐えうる男性77名分のデータを分析し、結果を報告する。

**手続き** 2010年7月 (以下Time1) と同年12月から翌年1月 (以下、Time2) の講義時間内に質問紙への回答を求めた。その際、学内で最も親しい友人1名 (以下、Aさん) を特定したうえで回答するよう教示した。Time2回答時に初回の回答対象を失念していた場合には、対象友人のイニシャル等を調査者が個別に教示した。なお、本研究では両時点において同一の対象 (同性) について回答した者を分析対象とした。

**質問紙構成** 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意を記載した。調査の結果は研究目的のみ使用され。個人が特定される形式で研究結果が公表されないことを明記した。

### 1) 相互作用における接近的・回避的動機づけに関する尺度

Elliot et al. (2006) の作成した社会的動機づけ尺度の翻訳版 (長谷川・相馬, 2011) を用いた。接近的動機として「私は、相手とたくさんの面白いことや有意義な経験を共有しようと心がけている」、「私は相手との関係が深まるように心がけている」などの4項目 ( $\alpha s > .86$ )、回避的動機として「私は、相手との間で、意見の不一致や対立を避けようと心がけている」、「私は、相手との関係を悪くするような状況を避けるように心がけている」などの4項目 ( $\alpha s > .71$ ) を5件法で尋ねた。

### 2) ネットワークに関する測度

#### ①ネットワークサイズ

大学内でAさん以外に「あなたとよく話をする人」を思い浮かべ、思いつく限り、イニシャルを挙げるよう教示した。その人数をネットワークサイズとした (Time1, Time2の両方で測定)。本研究で用いるネットワークサイズの変化量については、Time2の人数からTime1の人数を減算して求めた。

#### ②共通ネットワークサイズ

①で挙げられた人物のうち、「Aさん (最も親しい友人) と知り合いである人」に○印をつけるよう教示した。○がつけられた人数を共通ネットワークサイズとした (Time1, Time2の両方で測定)。共通ネットワークの変化量についてもTime2の人数からTime1の人数を減算して求めた。

#### ③独自ネットワークサイズ

①から②の人数を減算し、Aさん (最も親しい友人) とは知り合いではない独自ネットワークサイズを求めた (Time1, Time2の両方)。独自ネットワークの変化量につい

でもTime2の人数からTime1の人数を減算して求めた。

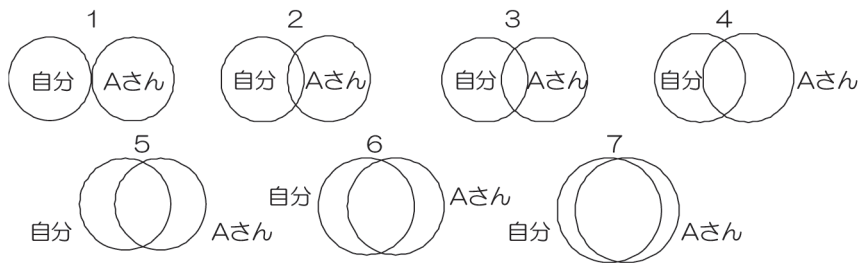
### 3) 関係の質に関する測度

#### ①関係満足度 (Rusbult et al., 1998)

「私はAさんとの関係に満足を感じている」、「Aさんとの関係は私を幸せにしてくれる」などの5項目 ( $\alpha_s > .87$ ) について、5件法で回答を求めた。

#### ②心理的一体感 (Aron et al., 1995)

以下に示す7つの図形のうち、あなたとAさんとの関係を1番よく表していると思うものを1つ選ぶよう求めた (1項目、7件法)。



## 【結 果】

### 1. 分析に用いる指標の記述統計と各変数間の相関係数

本研究で使用する社会的相互作用における接近的・回避的動機づけと関係の質に関する測度、ネットワークサイズの変化に関する測度の記述統計と各変数間の相関係数を算出した (Table1)。

まず、接近的動機 (Time1) と回避的動機 (Time1) については正の相関が認められた。本研究で用いる重回帰分析は、説明変数間の独立性を仮定しており、説明変数間の相関係数が高いと多重共線性の問題が生じる可能性が否定できない。そこで、この問題をできるだけ回避するため、独立変数を徐々に加えて最適な式を導き出すステップワイズ法を用いた分析を実施する。

次に、関係の質と社会的相互作用における動機づけについては、接近的動機づけ (Time1) と関係満足度 (Time1)、心理的一体感 (Time1) との間に正の相関が認められた。Elisabeth et al. (2002) の先行研究では接近的なコミットメントと関係の質の指標 (関係満足度、充実感、ポジティブな感情の経験頻度など) と正の関連が認められているが、本研究でも一貫した結果が得られた。

さらに、関係の質とネットワークの変化については、心理的一体感 (Time1) と共通ネットワークの変化との間に負の相関が認められた。心理的一体感は、相手が自分自身

の一部であるかのように感じる程度を測定する指標であり、親密性や共行動の増大などと関連することが確認されている (Aron et al., 1992; Berscheid et al., 1989)。相手との心理的一体感が高い関係においては、一対一の関係を深めることに動機づけられやすく、共通ネットワークは縮小すると考えられる。

Table1 分析に用いた変数の記述統計と 0 次相関

	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6
関係満足度(Time1)	3.65	0.80						
心理的一体感(Time1)	2.88	1.65	.486 **					
接近動機(Time1)	3.61	0.94	.622 **	.381 **				
回避動機(Time1)	3.21	0.96	.137	.198	.534 **			
ネットワークサイズの変化	-0.10	3.21	-.029	-.139	-.001	.107		
共通ネットワークの変化	-0.26	2.04	-.066	-.280 *	.087	.202	.543 **	
独自ネットワークの変化	0.15	2.71	.015	.045	-.066	-.024	.777 **	-.107

## 2. 社会的相互作用における動機づけ（接近的／回避的）が共通ネットワークサイズに及ぼす影響 (Table2)

予測について検討するために、従属変数を共通ネットワークの変化とし、説明変数をネットワークサイズの変化、関係の質に関する変数 (Time1の関係満足度, Time1の心理的一体感)、社会的相互作用における動機づけに関する変数 (Time1の接近的動機, Time1の回避的動機) とする重回帰分析を行なった (ステップワイズ法)。

まず、ネットワークサイズの変化 ( $\beta = .49, p < .01$ ), Time1の心理的一体感 ( $\beta = -.25, p = .01$ ), Time1の回避的動機 ( $\beta = .20, p < .05$ ) が共通ネットワークの変化を有意に説明した ( $R^2 = .36, F(3, 76) = 14.60, p < .01$ )。つまり、ネットワークサイズの変化が大きいほど、Time1の回避的動機が強いほど共通ネットワークが拡大することを示している。また、Aさんとの一体感が高いほど共通ネットワークは縮小することも示された。

## 3. 社会的相互作用における動機づけ（接近的／回避的）が独自ネットワークサイズに及ぼす影響 (Table2)

予測について検討するために、基準変数を独自ネットワークの変化とし、説明変数をネットワークサイズの変化、関係の質に関する変数 (Time1の関係満足度, Time1の心理的一体感)、社会的相互作用における動機づけに関する変数 (Time1の接近的動機, Time1の回避的動機) とする重回帰分析を行なった (ステップワイズ法)。

まず、ネットワークサイズの変化 ( $\beta = .82, p < .01$ ), Time1の心理的一体感 ( $\beta = .19, p = .01$ ), Time1の回避的動機 ( $\beta = -.15, p < .05$ ) が独自ネットワークの変化を有意に説明した ( $R^2 = .65, F(3, 76) = 44.93, p < .01$ )。つまり、ネットワークサイズの変化が大きいほど、Time1におけるAさんとの一体感が高いほど、独自ネットワークが拡大することを示している。また、回避的動機づけが高いほど、独自ネットワークサイズは縮小することも示された。



Table2 ネットワークの変化に関する重回帰分析の結果

	共通 ネットワーク	独自 ネットワーク
ネットワークサイズの変化量	.49 **	.82 **
Time1:関係満足度	.06	-.04
Time1:心理的一体感	-.25 **	.19 **
Time1:接近的動機づけ	.12	-.09
Time1:回避的動機づけ	.20 *	-.15 *

## 【考 察】

本研究では、特定の人物との社会的相互作用における接近的・回避的動機づけが個人の持つ対人ネットワークの変化に及ぼす影響について縦断的に検討を行なった。その結果、最も親しくなりたい友人との関係における接近的動機ではなく、回避的動機が対人ネットワークの変化に影響を及ぼすことが一貫して示された。回避的動機づけによって関係の維持を目指す際、自らの対人ネットワークを変化させることによって、関係内で生じる問題に対処しようとする影響過程が推測される結果であった。

男性のデータしか分析できなかったものの、最も親しくなりたい友人との関係において回避的動機が強いほど、その友人との共通ネットワークを拡大させ、自らの独自ネットワークを縮小させることが示唆された。つまり、関係内での問題に対処するために、お互いの立場を考慮した仲裁をしてくれる共通の友人を増やす方法を選択している可能性がある。先述したように、関係に何か問題が生じた場合、独自ネットワークの他者からのサポートを知覚することができれば、自己主張的な対処をとることも十分可能であると推測される。しかし、本研究で得られた結果をふまえるならば、少なくとも男性にとって、関係に葛藤を生じさせる危険性がある相手への直接的な働きかけよりも、問題解決をお互いの立場を慮ることができる第三者に委ねる方略の方が、負担が少ないのであろう。

しかし、このような対人ネットワークの構築にはジェンダー差が認められることが明らかになっており、女性でも同様の傾向が一貫して認められるかについては検討の余地がある。特に、本研究では結果が得られなかった独自ネットワークの変化については今後検討を継続する必要があるだろう。なぜなら、これまで青年期から高齢期に至るまで、女性は男性よりも大きなソーシャル・ネットワークを有する (e.g., Leavy, 1983) ことが繰り返し確かめられている。また、他者と円滑な人間関係を保持してゆくために必要な認知的判断や行動である社会的スキルの研究においては、男性よりも女性の関係維持スキルが優れているという結果が示されている (和田, 1992)。このような知見をふまえるならば、対人ネットワークを拡大し、維持することについて、男性より女性の方が容

易であると感じていると推測され、男性とは異なる対処方法を選択する可能性がある。

また、関係に生じた問題に対する取り組み方の違いにジェンダー差が認められる可能性もある。これまで女性は男性よりも親密な異性関係において、問題を明確にする必要性を先に感じ、女性は男性よりも別れを切り出す傾向があることが示唆されている。(Hill, Rubin & Peplau, 1976; Davis et al., 2003)。恋愛関係崩壊時点での対処と関係進展度との関連を示した研究においても、関係が進展しているほど、男女共に説得や話し合いなどの対処行動をとるが、その傾向は女性で顕著であることが示唆されている(和田, 2000)。これら先行研究より、恋愛関係という親密な関係と同様、友人関係においても男性より女性の方が自ら問題の解決に動機づけられる可能性が高い。つまり、自分自身の主張を支持してくれる独自ネットワークを必要とするのはむしろ女性であると予測されるのである。今後、女性のデータも増やし、これらの可能性について検討する必要があると考える。

最後に、今後の展望について述べる。本研究では、特定の人物との社会的相互作用における接近的・回避的動機づけが個人の持つ対人ネットワークの変化に及ぼす影響について検討を行なった。その結果、特定の人物との関係に対する回避的動機づけが対人ネットワークのあり方を変化させることが示唆された。一方で、このような変化が特定の人物との関係における満足感や関係の継続期間に影響を与えるのか否かについては検討できていない。Elisabeth et al. (2002)によると、回避的なコミットメントは関係の質(関係満足感やポジティブな感情の経験頻度)を低下させることが示唆されているが、対人ネットワークから得られるサポートが存在する場合でも同様であろうか。今後、人が特定の関係における対立や意見の衝突に対処するために構築する「共通ネットワーク」や「独自ネットワーク」が関係の質を維持するために果たす機能について詳細に検討する必要があると考える。

## 【引用文献】

- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. 1992 Inclusion of Other in the Self Scale and the Structure of Interpersonal Closeness. *Interpersonal Relation and Group Processes*, 63, 596-612.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The Relationship Closeness Inventory: Assessing the closeness of Interpersonal Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Davis, D., Shaver, P. R., & Vernon, M. L. 2003 Physical, emotional, and behavioral reactions to breaking up: The roles of gender, age, emotional involvement, and attachment style. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 871-884.
- Elisabeth, F. & Brandstätter, V. 2002 Approach versus avoidance: different types of commitment in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 208-221.



- 長谷川孝治・相馬敏彦 2011 安心さがしと社会的動機づけが他者からの拒絶に及ぼす影響 第58回日本グループ・ダイナミックス学会大会発表論文集58-59.
- Higgins, E. T. 1998 Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46.
- Hill, C.T., Rubin, Z., & Peplau, L. A. 1976 Breakups Before Marriage: The End of 103 Affairs. *Journal of Social Issues*, 32, 147-168.
- Klein, C. A., & Milardo, R. M. 2000 The social context of couple conflict: Support and criticism from informal third parties. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 618-637.
- Leavy, R. L. 1983 Social support and Psychological disorder: A review. *Journal of Community Psychology*, 11, 3-21.
- Rusbult, C. E. 1983 A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 101-117.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M. & Agnew, C. R. 1998 The Investment Model Scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal Relationships*, 5, 357-391.
- 相馬敏彦・深澤優子・浦 光博 2004 二人の味方は私の味方？—親密な関係での協調的・非協調的志向性に及ぼす特別観と関係外部からのサポートおよびその対象におけるパートナーとの重複の影響—日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 204-205.
- 相馬敏彦・山下倫実 2011 回避動機が満たされれば安心できる？—社会的相互作用における接近・回避的動機づけが関係で経験される感情に及ぼす影響—第75回日本社会心理学会大会発表論文集, 127.
- 和田 実 1992 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要 1, 部門 43, 123-136.
- 和田 実 2000 大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情及び関係崩壊後の行動的反応一性差と恋愛関係進展度からの検討—実験社会心理学研究, 40, 38-49.
- Widmer, E. D., Kellerhals, J., & Levy, R. 2004 Types of conjugal networks, conjugal conflict and conjugal quality. *European Sociological Review*, 20, 63-77.